見捨之

玉うら　并古

哥を名とせり

[V. 29]

PL788
.4
.G4
1654
vol.29
Copy 1
Asian
Japan
Cage

LIBRARY OF CONGRESS

2004 551302

34

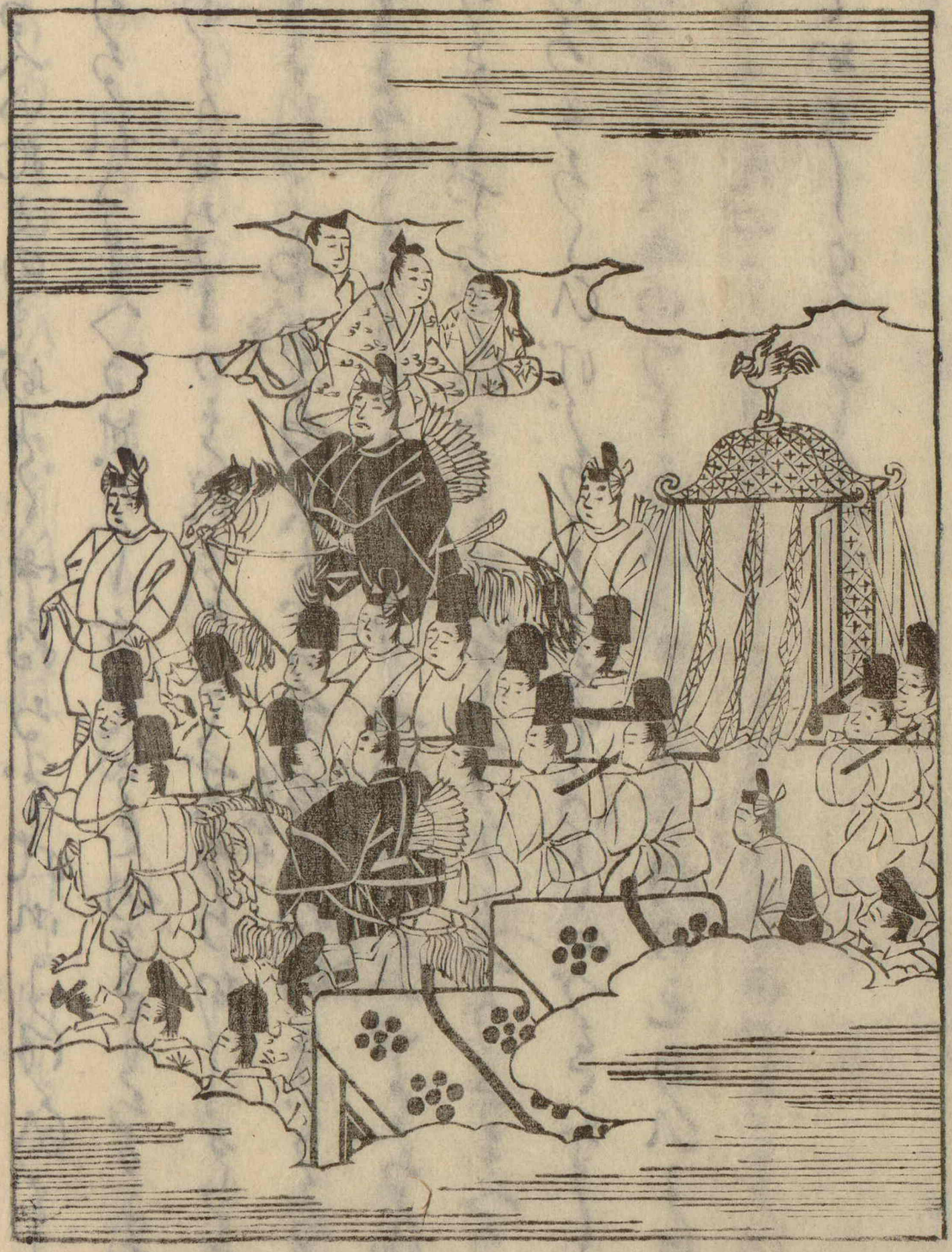
ほ代廿六才の十二月より廿七才の二月まで　一源ノむらさきと若むらさき
くおぼしいづるとも。いでまゐらんこと
もとおぼしあつかひたまへ。ひきすぐれ騒こそ
うるさいとおしくされこの人のれあしともやま
ごとなるひそ。うらぐしうへきこれえなれ。され
ひおもひぐ。なまごゝまつけても。さはくしく
もうしもくきなる御のとし紙。おぼし患だず
なじ御しなふれこうさ御なさそせひぐ御なすく。
けぞやなるれまてなしなじされおんまつけてこ。
おこうまりう也やなじおぼし人さふ。地それさりて
な。大原の行啓とて。世な御人なくさるぐ候。
ほ六条院よりもれりくぐひさ出ひこなふ。冷泉院うちむ

時る出ぬひて、朱雀（すさか）より五条の大路（ちぬ）をよしざ海に
あれぬふ。かけらげのもとまで、抱見車（ひま）隙なし。
行幸（ゆうき）といへど、かならずかうしもあらぬを、かふいここ
ちち、上達ゆもこれ心ことに、此馬鞍（むまくら）をとくの人、隠身（ざいじん）
馬ぞひのこちらけぶち、さうぞくとかざり給ひて、
めづらかなりし。左右（ひだり）大臣（ぎぎの）、内大臣（ぢぢ）、納言（なうごん）よりしも
ちゝ、ましてのこらずつかうまつりぬへり。何を色の
上のさぬ、えびぞめれしてがされ、夜上人、五位六位
まで美（き）たり。雪こぐいさくかげうちつゝて、道の色
さへえんなるに、みこ達上達ゆまで、こうり如く
づひぬへるいめづらしき拘（うり）のれよそひどもを

まうけぬふ。徒(そ)清(を)の鷲(たか)絹(かひ)どもも。まして世なり
めなれぬまり衣をこゝぶれさつゝ。乱色ことなりめづら
しうおしさしとゝまるさをひ出けゝ。それ人とも
なくかすかなるあしよけさ車などゝ。輪(ロ)をとし
ひじかれおもれげなるもありうさ(桂河にかけたしこ)もしのまとなど
まもこのましうさちさ海よふ。よくさゝる海おほかる。
よしのるいのひめ(ひとりぬ見張ふんをいふ)も立出ぬへりそこぞくいどこ
つゝしぬへる人のれうちち宿舞をこゝぬふまくり。
(冷)みどのおり夜のれぞなりて。うるもしうさかがつさ
なされうるりしめるおなずしひ。男ゆべき人なし。ひが
ちくおとゞをひとしれずめをつけなりうまへれど。

ところ〳〵せう地こそげにさらなりはまれしかす人
れど、限ありし、いとゝ人よりもすぐれて家〳〵人と
みえて、御こゝろのうち〳〵はかは、猶うけるべくも
おもはず、ましてこゝろあらや、おしやなどこゝさ
ごぶちのみこ入り心うつと、中少将なる人これ乃
君だにやうの人はおとなしくもおもはずこそえつきられ。
さしまさぐひあうおりしもまゐりけるを、源氏乃
おとゞの御かたざまもいとしかれども、こそ給もみえ。（冷ノ源ニこゝろとおもひ冷ハまことてもうらくさとく之）
思ふるものゝまいすうしいけるしうかうしけれく
めでたきありさまはうちさぐひもおりしくうるま
さりおそ、あるうひといはこれ中にこそげにけるへひこと

なべい物とのこ。おとこ（係）中（タ）ねなど此れまほひけ
めなれこまへるとゝいでぶえどものうるまなりまや
あらんおなじめまれともこゝぞ。くちおしきぞ
とされこゝや。無（量）ゑ家もおりす。右（げぐろ）ちねのさぞ
ともなりまよしめくもふのよそひいとなる海
かきてやなぐひなどおひて。づうまつりこまへり。
いろくろくひげぐちまこゝえて。いと心づきなし。
比いでゝは女のつくろひこそこゝろ。ねの色あひまは
まこしんいとゝつりなまことを。つ（ゐ）きれ心ちまは
こおとしなひてがつも



おとぐのさゝのおぼしよるまでの給ことをいか
がはあらん。こやづくもこころにもあらぐ。こゞろ
しさあるまさ夜にやと。おもひつゝこゝまふを。
あれくしさすぢなどをがまてもなれて。おこゝる
つゝまゝりぬらんぞしれんも。おしうもあたん
しとぞ。しより給けり。うくて。なまおりしまし
ゝさて。ぬらしとぐめ。ふぞ遅アのひらぐりまもれしまゐ。
ぬさうぞくともなをし。かりのぬよそひなどま。
あらゝめ給ほどま。六条院よりぬこゝさぬ。ぐぞ抽
なぞ。ゆしをゆへり。かゝまつゝまゐしを給べく。
ゐてゐぬかしきありかれど。ぬ抽思のうしを

羹(さう)をさせたまへる女なり。羹(ふうど)人の左衛門の尉(ぜう)を此(冷)使
まで。さらじ一枝(えだ)にて。まつしをなふ。(冷)ほをだとしては。
あるとしやさやうのありのことまゐふ。まゐらし
もしくなん

(冷)雷ふるきなどしほの山にころさじのふるき
詠をもなふる。(比)大政(じ)大臣のかゝる時の好
音にうけうまつりなへるしあしなどやありけん
(ほ)おとゞ此(冷ノ)つゝひをしこまるまゐてなさせなふ

(ほ)などしほ山こゆきつもれる松原にかふぞるを
なる詠やなりしんと(比)そのころほひこそしことの。
そばくなもひいでしるもひがことまやあしん。

まくらの日かくらうしのたらいは、嵯峨日うへハこきましせ
のみひてこさや、かれこしハあばしるびさぬんやと思え
のへりたろうさもこさしまいとうちしけらかこ
うまやうるかしさげえてるしあしぬがあらしさは
こゆひておひあれことやとわえひ給抱うらくも
とりもうしを給もれうれとあばそれへりま嵯峨日も
うちこうしあさぐまをしこゆさまいさや
うるそらの光やいこしあばつあさいあらしらじあらう
あんとあつそを、うへもこしまふしつくのととは
そでのしまつど、中宮くくておもすれだし、こて
あびらのあばしき氏びんちすらべしかれあらぐま

こうぎん

ヤ六

ヤナ

しられても女れ(こきぢん)うらて又さかしひ人ばなれど
しひこぶろめりしすぢなり。ゆゑ人のさもなまを
つうまつらんは。ぱぐうもひなりんも。(冷)うへを
はのこなりて。えかけもなれておもふはあしじと
のたまへば。(笠詞)おれうたて。(冷を)めでたしとこなりともこころ
もて宮げ人しひたんこそいとさしゐたるこて
ろなしめとて。ゆしひ給。(源詞)いでそこなしもぞめでこさ
こし給もんなどのたまひて。まゐれ人し
(ほ)ある○さすひりは更よくもしぬをなどて
こゆきなめをこさしけん。(詞)なをおぼしてなど。
たぶすしめのふ。(ん)とてもうでも。(まづ)先れ(ヨノ)もぎのこと

そもちとおぼして、その御まうけの御でうどれ、
こ面かなるさからどもくもへさをなふなるくれれ
そしさ紙御こころまはいともおもほさぬことをぞる。
をのづからぶけくいあしくなるを、ましてう
ちのおとゞまも、やがてこれつゐでまや、しらせ
そてまつりてましとおぼしれがいとめでたう
所をさまでなん。こしかへりて二月まとおぼす。
(源卅七夕)
(玉)
名ハさてさく、なるくしのべきほどなるぬを。
人の御むすめとて、こもりかゝすほどハかなるぞ
しも、民神(こだがこ)の御けとめなどおらハなるぬ程なれば
こそ、年月もまぎれすぐしのへばもしおぼし
(むを文づくノ事)

よろこともわらんにハ基日の神のけうろうがひぬへ
きもづゐにはかられてやむまじき拠りにおぢき
なくけぎとがましき後の名までうたてあるべし。
なをくしき人のきいこそいまやうとてそうち
わらこむらことのこゝろやすきもあれなどおぼし
めぐらすにおやこのけ契こゝろべきやうなしおなじ
かは祇がうろゆりしてをしらをたてまつらんなど
おぼしさぶめてこのけうしゆひにハかれおとゞを
なんけきうそこ罪しなひかれハ太地ゝやこぞ志冬
つゝこりなやこ給ことさらにをうたり給ひ○ぞ。
かゝにあはきてびんなるべきらしきそしなり。

中(タ)ねの君もよろひろ三条(大宝)まそひさふらひのひて、
こころのそこちなくぬれしめて、おりあしさをいる(源ム)
をましとおぼせ、世もいとさるめるく、こや(大宝)もうせ
さを給ひ、此(ヨリ)ぶくあるべき紙、志しぶかなまて抱し
し面りん、つこふきこと、おほかんおまする世なり。
このことあらりしてんとおぼしらりて、三条の宝(大宝)に
此とふらひぞらけたり給、今(地)いまして思びやうな
ふるまひぬべ、こゆきまおらぶよそほしく、
いよく先をのこそへ給、此ちちなどれ、心世なり
こしぬ心りしてめづらしうこ(大宝)なり給はいと
此こちのるやましさをとり捨らるくゆちして、

ヤ八

おきねのへりぬけうそくまうりてよろげられど
抱などいとよく罪し給かし（添河）うはなりしまさに里
けりとなまがしの朝臣（タ）のうろまどりしておどろ
おどろしうなげき罪しさすめれバいりやうまれ
さき給まうとなん。おぼつかなぐり罪しさせ川家。関
などまもことなりついでなき限ハ無しず。おほやけ
まつかへともなくてこもり侍れバよろぼうね
うねしうよぶけくなりまて侍ひよりひなど
これよりまさりへうしさへぬまでかぐまりありく
ためし。若も今も侍めれどおやしくあれくしさ
本性（ぜう）まそふもれうさまなん侍りべきなどさそし給。

大文詞
年のつもりのなやことしふうまへ川に月ごろは
なりぬるをことしとなりてもこれにすくなさ
やうはおぼし給れば今一こびごまうくにあり罪し
さすることもなくてやとこうろぼそく世ふうまへ
つるをかふそ又すそしのびぬるこうちし給れ
いまはおしことむべきほどよも給しぞ さんべき
ひとぐまも立をくれ世のすゑにおりとまれる
さぐひと人のうへそいとうろづきなしとこ
給しかば出たちいそぎをなん おもひもよほされ
給るにこの中夕ねのいとおもれにおやしきまで
ちひあるひこうろをさもがいなふをこ給るにあ

き海ぐまうけとぐめしれて、いまゝぐなかびき侍
と、あぐなさまなさて、此地こゝ急のまちくらもおこ
がましそれど、さることにもなれば、いとあはれ也、
此涙もれがたりどもむうしいまのさまあつめきて
給ひいぞまうち(詞)のおとゞは、同へぐそぞまいるを
給ことしげかんを、かうついでに對面のあらば、
いかまうれしかんいかぞ、さてしたしきんとしことの
侍るを、さらぬさついでなくてはいかゝめんもまさがる
それがおぼつかなくてなんとさこし給、あはやけと(大笑詞)
のしげきまや、ひさくしのそろぞしれかくら
めまや、さしもとゝひ抱し侍しぞの給ひて

べきことはなるざ雨のことりは中夕ねのうち
めしげるしられ（雲ぬ人す）ことも侍るをさしじめれことは
しらるど今はけるくもてなすりつけて立
そめましゑのぞりへさらくおれまもあらず おこ
がましきやうにかくりても世人もいひもらす
なるをなどもれし侍れどらそ（以）こうさろむし
ありいとさけがたき人のほんぞうまて心えずなん
るまゐるとこ（地）の中夕ねのれことおぼしての給
へぞうち（泳）わらひなて（訶）いゆるひなさまゆるして
まて給こともやとこさく侍りてそりけさんなん
（玄ぬ人す）ふすめやうありしかどいと（以）まびしくいさん

十十

給らしをこ侍ノ後、なりてきまでことをもまぎ給
けんと人けろうらひもふかまへてなん。よろづの
ことまつけて、きよめといふと侍れば、いうぐいさも、
さりかへし、すい給ひ（ヨシダ洗濯之）ざらんとは、むかまへながら
ううらちあしきまごる（渇恥世之）のすゑ、りまちさる。
ゆくすむべきあこそいできがらへいせなれ、なる
ことまつけてもすゑまなれば、おちゆくけぢ絶
こそやすく侍めれ、いとおしくきくぬふるなど、
なてさろ（やしよりむぐれるを深ノさう給之）ハかれ、しりぬべき人をなん。むひまがふ事
こと侍て、ふいまごるさりて侍るを、そのおもも、
さらひがまぎともあし侍ぞありしかば、あれ

がちまことのうろをしぞ人さふことも侍らぞ。
こぐさうもれしくきの（深く古きすくなきを云之）すくなき紙、がごとまてを。
なまうはこさひゆへゆうして、おさくむけびもこ
侍らずして、とし月侍けるを、いぞうさうし（冷ノ）
めしかん、うちまお目をしらしやうなんあり。内侍志
かみこやづへすう人なくていかれ所のまつりご
としどけなく、女官（ゑん）なども、お目やけどをつうま
つるまうぞなくことこぞうしやうまなんあり
けるをしぞいまうへ（冷）まさふしふこらう（古老）のすけ二人。
又さうべきへぐ、さ風（文づへをのうむとのうすこ）ぐまやさすうを、はうぐし
うえうしはを給りん、しぞまま多ぐふひとなん

なさ。な彼家たう人のおぼしろかりで。亂志
いとなまたてたしぬ人なん。いましへよりなりたる
けり。おたくかまりしろさくるのえしひてた。そ乃
人なりでも。年月のちうるなりのぼな多ぶひ
あれど。志ろたぐふべきもなしとなしは。たくるの
恋しぶるえしを語りんとなん。うちくりおほを
られたりしを。すげなさことしもなるかは志
語りん。家づんもさうべきすぢまて。上も下もしひ
とうび。出たけこそ心たきことなれ。おほやけざ海
まて。さうきろのことをつきざり。まつりごとを志
ともむきを志たくめ志んとは。たりぐしかず。

あもつけさやうなるなぼしこれどなどゥ又さし（すぢよりとえ）を
あらんさぶ我身のありさ海りしこそよろげのと
ゆめれと思ふまゆしつゝでまなんよもひの御ど
などさひ罪ゆれば、かれ（ゆゑ）れさぶ身あべいことまなん
ありけりを、いつなべいとぞともゆあさし見
まほしう侍り、けいでなくてハ對面侍べきりを
侍しぎ、やがてかうことなんとおしりしゆべさ
やうをさひめぐしてをうそこゆ志代れなやこま
ことつけて、抱うげますまひ見りしげまりしも
びんなうさひとまり侍よよろしうもれをさせ給
れば、なをかうさひをとをかつゝでまとなんかふ

なれがおもをうちひきたるつゆてはとなん思ふ

のまゝ。さやうにつゝ人もれきせめへと男し給。宮（大宮詞）
いかなく侍けることなるかしこれも。さ雨ぐに
かゝるなりすう人をいさふことなくひろひあけ
めしなくにいかゝる心にてかくひきこゞへ。かこちき
そしらるゝん。このさしごろうけ給ちりてなりぬる
（源ノ娘を易いで給と大宮ノ手給ひしと云ヘ）
しやと男しの人が。さらやう侍ことなりくしき
（源詞）
さ雨ハかれおとぐもなのづくしこゞの男のひてん
（ハ）
ちぎくしきなれ人のなりしひにてこゝろことに
侍れば。あるさんにつけてもらうがはしう人いひ
つゝへ侍しんを。中（タ）将の朝臣にぐまゝまゝ口きまへ
しきを侍しず。人にもしきを給まじとれらち

ぐるめ男し給うち（比）のあほいとのまもぐ三条の家（大文）に。
あほきお（係）とぐつくりおりしましうりうし男（行）なて。
いかるさびしげまそいけりしきれさ面をまち
うけ男し給しん。ごぞんなどもてさやしおまし
ひきつくあふ人もちぐしうあしじかし。中（タ）ねい
れともまこそ抽をしれつゝめちどおどろきなて。れ（比）
こどもの夫遊むつましうさうべきまうち（法志之家れ瓦）志うち
そてまつれ給れ（以行）くぐもれれこうきなどさりめべく
まいらをよこづしもまいるべきをくりてもれ
さはがしさもうちるしんなどのさまふ程に大家の
れめこあり六（文人行）条のお（係）とぐのどふしひりつうる

めへるを。もれさびしげにゆれば人めいとおしうも
うとじけるうもあるを。ことくしうりう冥こう
やうにはあしで。けうりぬひなんや。毎いめんに(涼)こえて
すゐしげなることもあるりと。こうしてこまん里。
(ゆん)なまごとにはあらん。このひ(雲カ)めぞ君のれことと。中(タ)ゐ乃
うれへにやとおぼしまいすに。(大字)こやもりうれ世御里
なげにて。このことをちよのこまひ。(涼)おとぐもにく
うぬさ海に。ひとことうちいでうしこと語たんに
とうく戸人こふこともえあしじりし。つれなくて
(タ)しいれぬをうるにいやすくしず。さるべきかいで
あらば人のれことになびさがほして。ゆうしてんと

おぼせ・れこころをさしあもせての給もんことく・
せひよりこまふる・いとゞいちび所ありしんか・まる
ほどかさしもあらんと・やすらもうゝ・いとけし
うゐれあやまくごろありし・されどこやく
のこまひ・おとゞも對面すべく約おもするまや・かる
ゞこまうゞけるし・まいりてこそハれかしさる
しるゞもあるぞ・しるりて・れさうぞく・心ことる
ひさつくろひて・ごぜんなどもことくしさ・さ面
まはあらで・いたり給・老ぶちいとあまるひさつねて
とり給さ面・もれくしうこれもしげるり・こけぶち
そゞろる・物し給ふ・ふとさもあひて・いとしう

そぐろる也し給ふときもあひて、いとしう
とくよかもちあはまひなどしだといはんに
ことひのみり。忘び深のれさしぬさ。さくらのし
さがされ、いとちぐうしりひさて。ゆかくとこと
きらびこれもてなし。あれきらくしとこえ
なへるに。六条(源)愛も。さくらのかしのさのれなをし。
いまやういろのれぞひさかさわて。しどけなさ
ぬほきこすぐこ。いよくこんもれなし。光(源ノ)こそ
まきりのへ。かうしたくかる。ひさつくろひこまへる
れありさ後に。なずしひてもこと給ハざるなる。悪逆
つぎくに。いとまれこそよげなりれなりしひまて。
つどひのみり。藤(ハノ才ニナラン)大納言。其家大先など今ハこそ也。

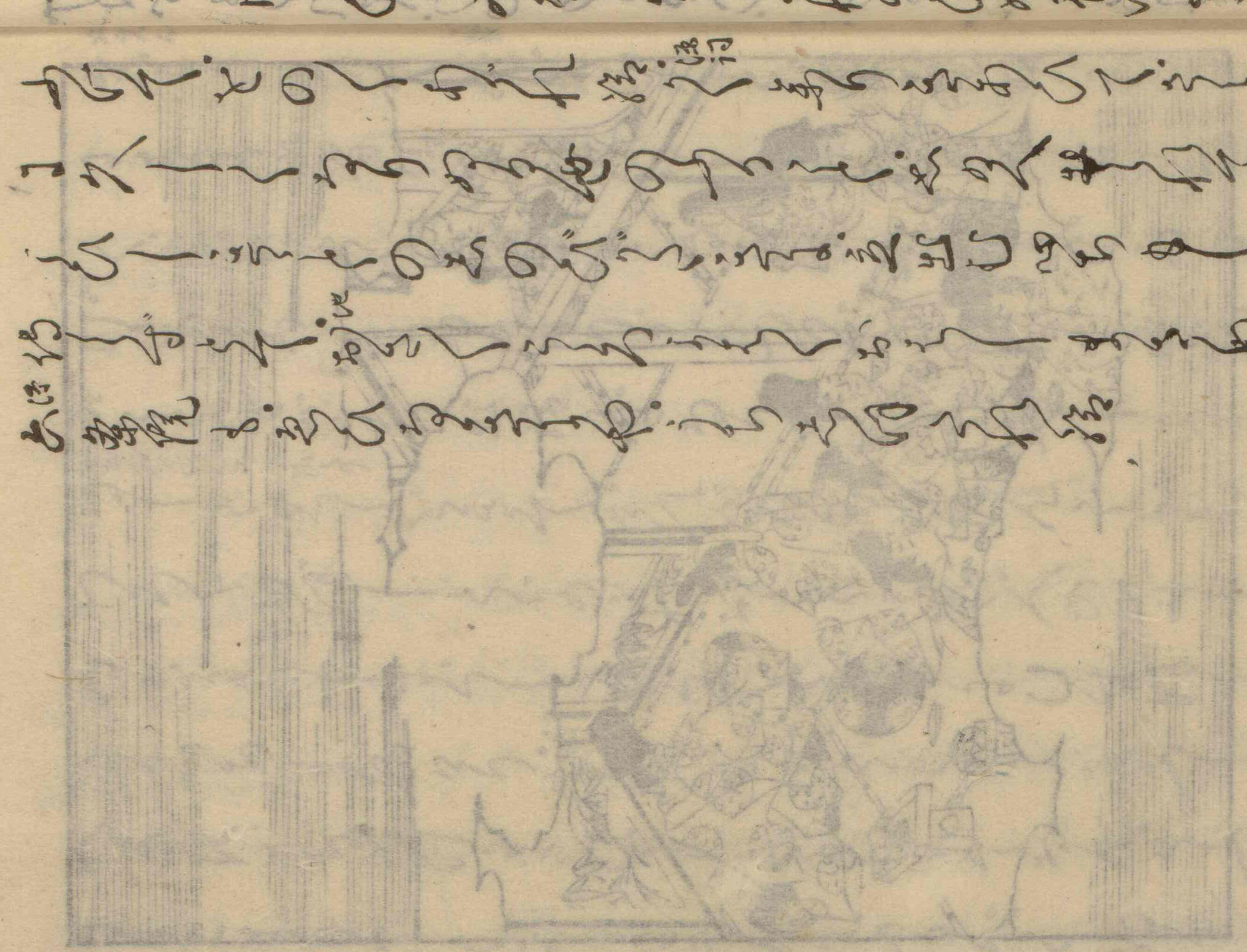
れいよもこれなり出てあそぶ花のゆう
ぐざともちやうさま、おぼしく、やんごとなき殿上人、
殿人親王、五位の殿人、近衛の中将、弁官など、
がう茶やうま、おほくべしき十余人つどひきたれども、
いみしうつきぐのゝ人もおはしそりけし㐂
あまたあそびたまはれ、これ思ひまゐりて、花のくもり
さいちいくまずられのへうれ者ども、あれ親まゐり。
ちとらハめづらしき御対面なりむしのことおほ
しいぞられて、ふそくまで、こそうかきことよ
つけて、いづれもよきれ心もそうなべくあれ、さしもひ
まことそいふことまつて長ちうこゝちかごとく

あげし出つゝれいのへぐそなく昔いまのことぐさ
もしごろの此物語は日暮れ此かほしけなどすく
めまいりたまふさふらひでいあしうりぬべかり
けりとめしなさまたぐうりてうけ給りすべして
ましうバ此かうじやそもましと申給はうんぐうは
しなるぐ海はなんうしとしふことあはく待う
なぐ。かしこぐ給はこのことはやとあばもば。
ワづらひしてうしこまりたる海まて抱し
給。むしより御やけ口くしのことは口けて。
うろのへぐそなく。大小のこと罪しうけ給もる。
これをなしぶりやうまてあはやけの此うしろ

ともづうまうんとあんとふみえしとまのこと
ぬそぞのこと志うまへしはいあまさやうなること。
うちまどつてゐれど。うちちくのはくらしでまま
こそはおぼろのこころざしもざるうはるふ。
ことあまくあんおまるともあまくて川あり給。幸よろこひ
まゐへてばいよしへのことあん道しうりけられを。對面
給ふりことも。ひとまれこのこと給れば。ことうざり
ありてよろづげされ。ならまひとは志うまへおぼしう。
あつしさほどまで。そのれいさほひとともひさし
ぢあめそこそ。ばとうひまれし給ふあともまん。以詞
うしかうきありく給ふしこうしめへば。けうしへも

げまかまれて、おやきくしひぐしきまでなれさふ
らひ、ころまへざろうことなくゆんぜられしを、
おほやけるつうまつりしきけ、ちれをなしに
ゆゆずまもとよび侍らで、うれしきゆゆりえば
こそ、そらぐしらしぬ身まで、かろ位まをよび
侍て、おほやけるつうまつり侍ことなりそんてよ、
ゑ身へ志しめまは侍らぬを、よもひの川まりまは、げる
とのづしうちゆるふことのこなん、おほく、侍けり
などうしてまり上給、そのついでまほのめかし
涼むくるとさうぬひしく地
出ゆひまりおとぐいと衰まゑづらうなること
まも侍けるれと、まづうちなきまて、そのこより

いかなるはけんとくのゑひにまへしき哥はなら
まのつゐてよりゆりんぐれへるゑへず。もしこさ
こしめさをしこちなんし給ふはすこし人
みすゝもありゆりまつけてはもろくしうこぬ
地どものうごくまつけて哥よひゆりたをかく
あしくもぐしとゆりまつけても又さうさ哥
まそみずくるつけてもおそれはおひさまん
らくおもるそへてもまづちんの人出くると
のゑつのでまかれいうしへのあま夜の地ぐらうは。
又あらうしれむつぐしのまくめをあげし出て。
なくなるわひとみかうらぶれのひぬ夜ハくらう

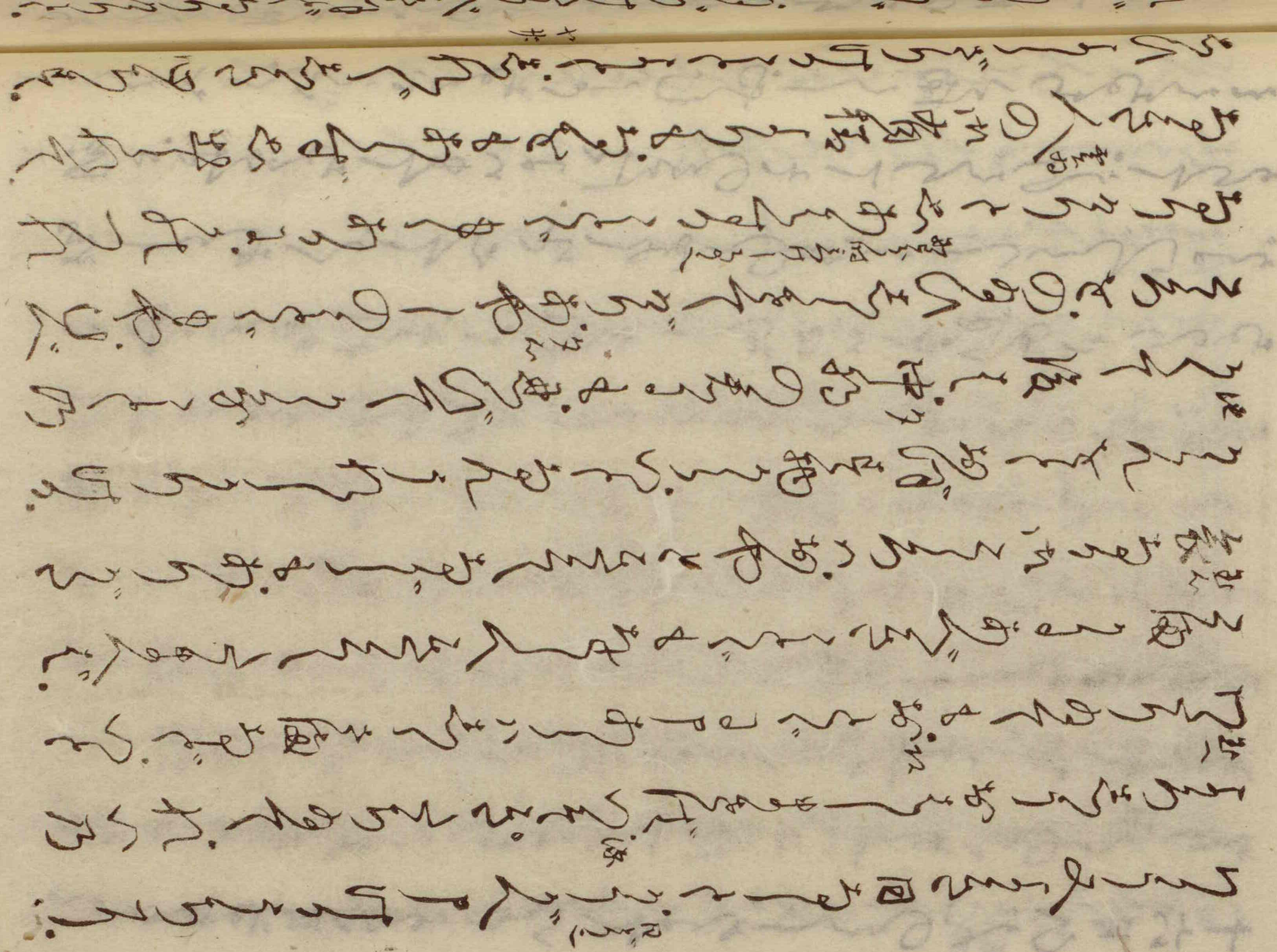


女もたまいて娘(妻)君のれこと紙見し出りまおりし
ままさられ有程いきほひをこまり給ふおりぎりなし
くとぐめぐらく志ほくとなきぬふおまごろ(地)もは
げまころことなりやりかうつのでなれど中(夕)物の
れことをばうち出給ひぎなりぬひとふしよりい
(雲ねと引くあし給ふす)
ありしと見しをきてがれば、くちいれんことも人
ひろくおぼしとぐめ、かれおとぐちる人のれはしき
なきなさしすぐしがるくて、さすがなひすぼられ
うろ心ちし給ひり今(詞)夜もれともりさふしふ
べき紙、うちつけなさはじくもやとてなん、ふふ乃
しこまりはことさしるなんまいるべくなりと

ゆめ人べ・さしぐ（源河）このれなやミも・よろしうみえ
給をかなしず・ゆめえし日・ぐぐへさを給ひず・ゆるゆ
ゆふべきよし・ゆしちぎりゆふ・（地）れ氣色どもようて・
をのくいでゆふ・ひぐきいとゆめし・きこぐちゆ
れともの人ぐもおまごとあつかなん・めづらしき
れこいめんまいとれやきまげなるゆるを・又
（園白とゆづり給ふ又行ふなどとへ）
いかなりれゆづり有べきまかなど・ひがちろえ給
しつ・かゑすぢとハおもひよしざりなり・（ぬん）おとぐ
（むしろ）ちつけまいとゆづしう心もとなう・えてゆんど・
ふとしゝ・けとりあやがんもびんなりしん・（ほノ）君ゆえ
ゆへんとじめやちゆまぎぐめて（ほノ）うろなとうう

かへらんとじめやちゐるぞぞめてこころをとり

そもちゐち海もじやむじとあさかくぐをも
かりてぶけだりてそのきはまいまてあるぞさ浪
がるいづらいしうものゝ事をもてかくあし給
ちゐりとおぼしてハ口おしかれどそれをさぞと
しべきことかハことさしまもかれあらりまれ
だくさんまおどかおぼしのおとうんこやげかへざ海
まもともしきめへらだ女(うさぎん)あれちどのおぼさんこともも
あぢさゐしとおぼをどどもかくもしりの給ハん
をさてをこぶべきことかはとよろげまおぼし
そりぐ(比)のこまふハ二月ついたちごろありなる。
十六日ひがんのうじめまていとよき日ありけり。



されどありまじうわぢけうべきほどなりかと。
忍へすことこそは地まぐさまめくしさなめれ。
うくてその日まなりて三条の大宇やより遣びやかる
此へつかひありぬぐしのもとなるばかなれど。
ことじもいとこまかしましなひて 無ノ拘 こそこえんこも
大宇尼なれハ
いまめくしき有さ海をかふハ志のびこめ侍れど。
さるるまてもなぐさこめしぢりを。覚しゆかす
べうやとてあんおもれは 行者ハ 敢りおさしめるすぢを。
ぢハ大宇ノ孫と中あきあつかと
うけこそえんもいとじれかしこまさしさがひてなん
大宇 ふるかるまいひもてゆけばむくしげ我身
もなれぬかけぐなりかりと地いとかりめしうまれ

あさくハしまへる後。歌（添）もさかえるにおこりまして。
ことゞもめんどさびしけり。猶あされバことはつかて。
（詞）ことがいあつれかくかさあれど。いうしや。この世によ。
世うしハよむてりもみし給けりそぞらしてり
そへてあやしくおいゆく拙まこそありけれ。いと
くれまかまひとなりあさぢうち臥しこゝろまひそ。
うくもゝ夜うしげはまつかれこゝろれ。三十一字の
ありまゞくもじもすくなく。そへてうくへしき
うつさありし。志のびてワしの給。（秋好中宮へまうり地）中宮よりうさ
れとかしきめ。ばかぞく。ばくらしあげのぐあど。いさい
まあくて。例のつがどゆまびしのつきさ地こゝう

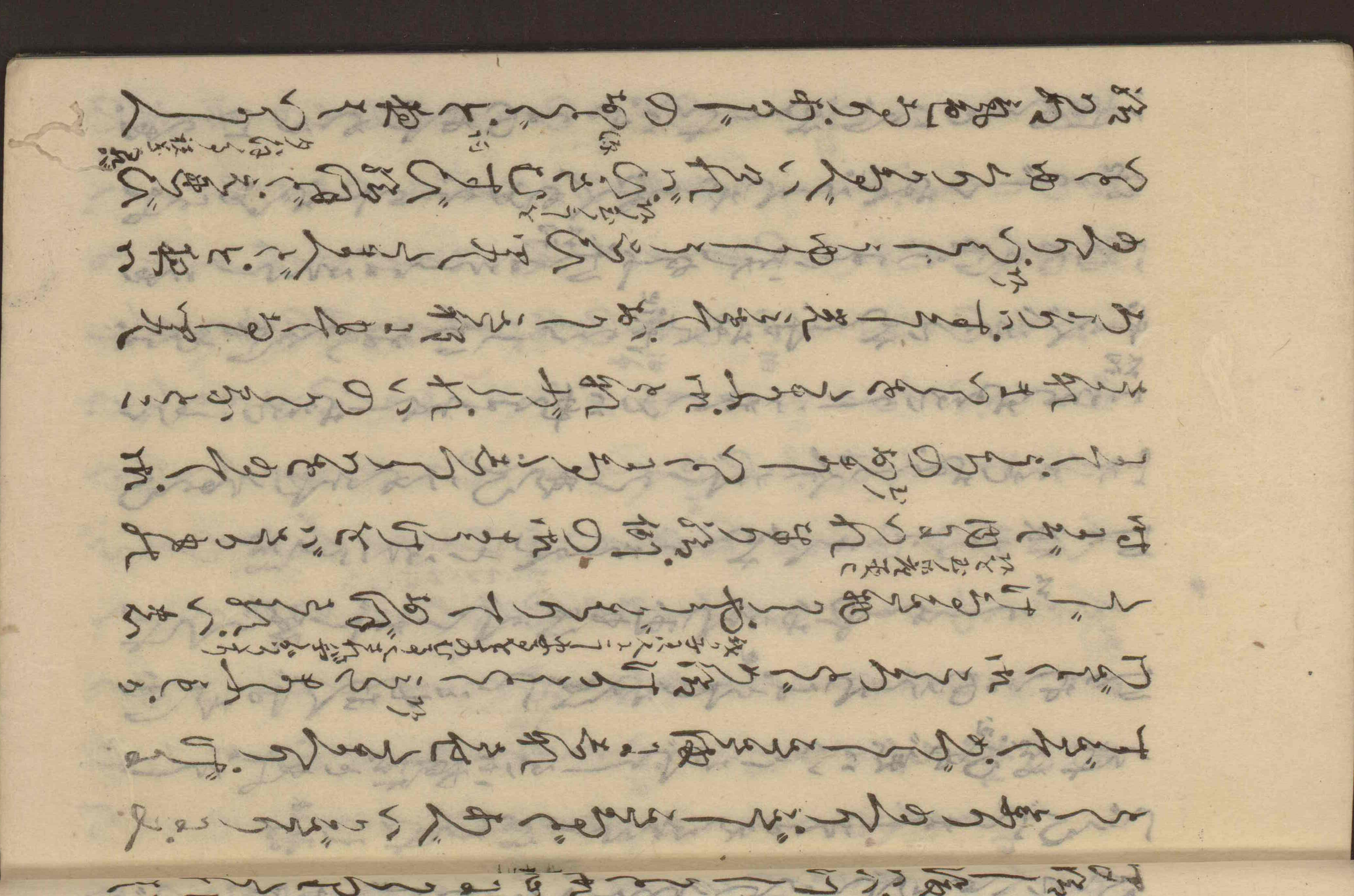
まるくて、例のつぶどもまがりしのくさき地こころ
ことまりかりかくなりぬ。れ（幸衣）ぐ。これこそ
ろぐろまさうぞく人ごのれうま。らしあふぎ
まで。どりぐまもいでぬへる有信。をとりまさしず。
さ面ぐまつけて。さぞりのれころぞせどもま。
いどこけらしぬへれば。かりしうこゆりを。東（二条ノ）の院の
人ごもかうれいそぞはさて語りれども。とふしひ
ぬしぬしのべきかぎなしれば。さぐさてすぐしさうま。
（ひしちのこや）老座家のれかる。あや（木つむくり）しうまれうりしう。され
べきことのありすぐさぬ。さぐいのれころりて。
いかでかこのれいそぎをこそのことはさてすぐさ
むとおぼして。かこのごとなんしいで語けり。哀

なりれこころざしなりし。おほまびのほそながひ
とかされおちぐりとかや。なりとかや。せうしの
人のかぞこうしけり。おもをのもう夜一ぐ。むしさ紀
のしらきりゆり。おしれぢのれこうちきと。よれ
衣ぞこまいれて。つゝいとうなもしうてなれ
ぬへり。れ。ふゝまは。しらをのべきなぎまも侍れば。
つゝましなれど。かうなりもおもひこまへしのび
がたくなん。これはいとあやしなれど。人まも語りを
よと。おいしかなり。夜れんじつけて。いとあさ
ましう例のとはぼすまれ。れかほあらぬ。あやしさ
ゆかぐまとそあれ。かくもれけしこしうな人も。

かゝへはそあれくあみくくまへも

ひさいりちかとつりうかそふけれ。ふみすぐまなぢ
ぐゆうしやとて。くへりとはつうきを。もうしとゆく
せちん。ぢうしみさこのいとしるうしうちも結けう、かちまでを
人まかとさんはいと心ぢうしさへなりと男ゟ絃流こ
うちさのさともよ何のおるどすぢ代所あり
紙力をそうしうれくれ衣まがさもとま
なれずとゑへが流てはむりしぶまおるしなを。
いとつりあうまづくい。悲しふうし。つかうくうう
くさめへり。かりどまくさとみしかしゑきぞえ。
わんび結びで。このうくいうとつん衽とそまして
いまはちらしあるくて。ざらろをりつりんといと

あしがりぬふいでは遅るすれさはがしくとも我をんい
とのぬひてお(池)やしう人の心よりまじき此心だんこそ。
さしでもありぬべきことなれとまくさまかきぬひて
(ほ)かし衣まさかしころもかしころもかへきくも
かし衣なるとて(羽)いとまめやかなかれひ(まつひ)とれこそ
このむすぢなれば掴して侍りなりとてこをなり
ぬへば(む)悪いとまほひやかなりしひぬて(羽)あれいと
あしろうじこうやうまも侍りかれと。をなし
がり給(池)すしなしごといとなほりや。内のおとじは。
さしもいそがれ給まじき此心なれどめづらかな
ぬ給し後はいけしかとれ心よりうまとしだ。



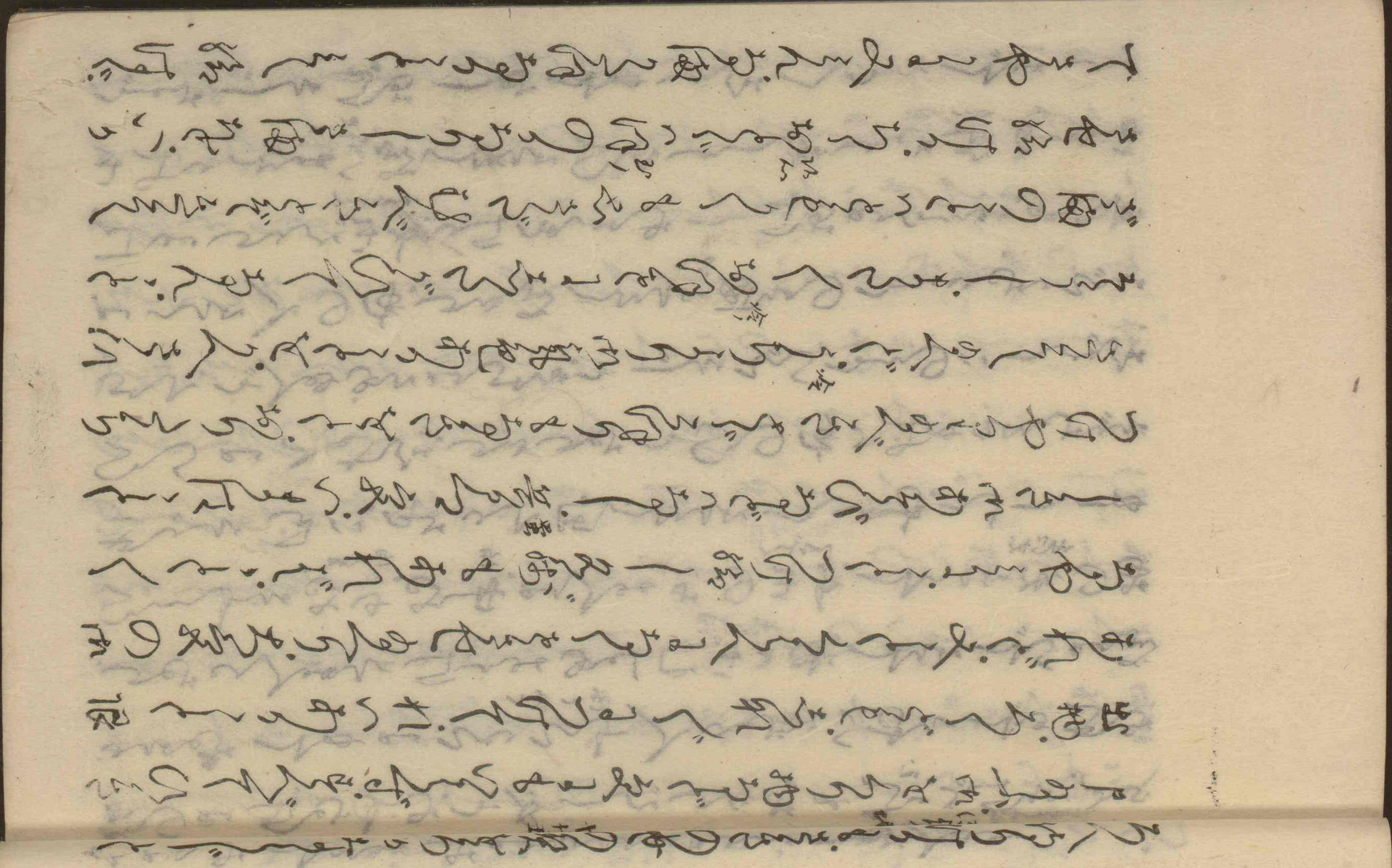
とく来りぬへりぞしさるぞあべいりぞりは又
すぎてぬぐらしさき夜はしれさせたまへり。げは
けぎとれこころとぐめ給けりこそ（ゆ）こゝまふも。り
こゝけるさ抱りし。やうがもりて（我り子まゝ人ニこゝゆふるをとのむるすくされバやうがりより）あばされ。い志
時まぞ（はとむノ出産歌に）間まいれまり給。例のれまうけをばさりまれ
まてうちのおまりいとまるふしつゝをめて。れ
されまいしをこまふれとれがしれいのうふとこ
ろよりはすそし光こきて。おりしさ程にもてゐし罪
ぬへりいそ（ゆ）じうゆしうしひ罪しうまへど。と思い
いとゆくりなるべいなれば。ひ（ゆ）さむすび給ほど。え思び
給はぬ氣色なり。おりじのおとゞ（源）と（河）思ていりしん

ざ面のことハかけ侍しれバ。なまのあやめとけりを。
給まじくなん。こゝろ志しぬ人めをかぎりて。なをよれ
つ日のさほうまと罪しぬふ。げ(以詞)まさしまさしさを
やるべきこと侍しずなん。此(池)りたしけまいりほどな。
(以詞)りさりあまさりしこまりとバ。世まこゝあしあまことく
罪しさをなぐら。今までかく思びこめさせこまひ
けり恨もいりぐそん侍しざんとまこて給
(以)うしめしやおこさろ玉も紙うづくまで破がくれ
けりあまのこゝろよ。(池)とてしなる紙つゝもあへずしほ
これ給。(玉)ひめ。恋ハいしちづしきれ有程どもれさし
つゞひづくましさまぞきこそ給ちれじ。(源)
(以)なるべきなるかなるべきなるまなるもなるもなるもなるもなるもなるも

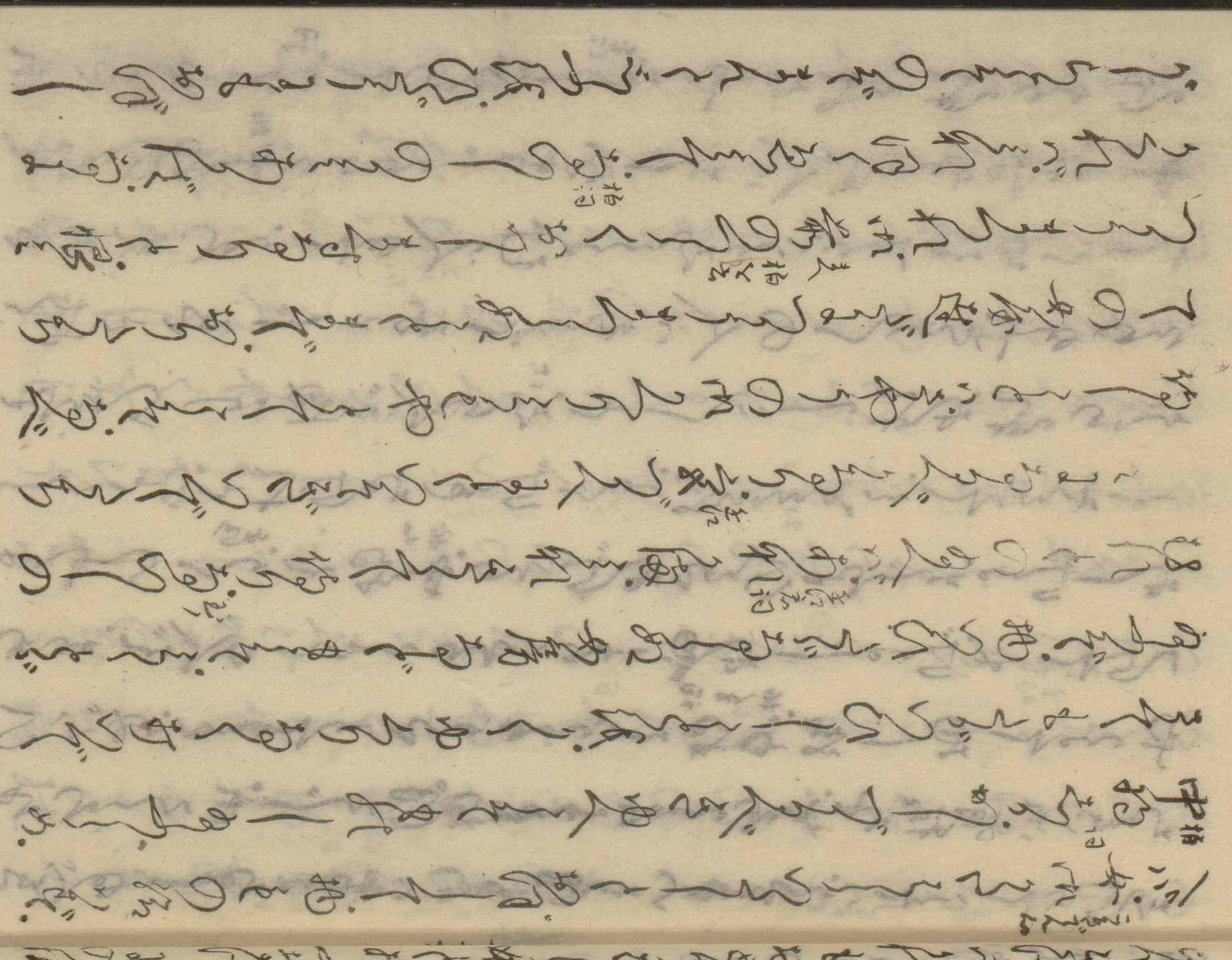
つどひづくましさまえちきぞしはたねじ殿

ほうるべちまくうちぞさうまおよそてあまも
君ぬ藻くづとぞうしいと（詞）まりちまされうちつけ
ごとまちんとさうしまへぞいと（詞）ことりまちんと
（地）きうしやうくちまくて出のひぬみ（ゆ）ろうぞさく
人ぞ御子ちくつどひまへり れけさうべもあまる
まじつまぬへれば この（は）おとぞくいりおもしてほど
ゆうをいうちうことりかたうるがひとまへ
れ夜の君ぞち中（拍）ぬ弁（伯弁）の君がりぞほのきりまへり
けり人きれずさひしくと紙からうもうれしうも
むちりぬふ弁いうくぞ打出ざりけりとさくめさて
さ夜ことちうおとぞの（添）れこの（好ミ）こともちめり中宮の

れこぐひりまして給ふんとやはげすしんなすと。
をのくいふしとさくぬへど。なをしぞしれ
心づひしぬひて。世まそしりなきさ面ま(むと)もて
なきせぬへ。なまごともそろやすき間どれ人こそ。
えぐりがうしうともうくも仰べかめれ。こなるなをも
そなるをもさ面ぐの人のきそしなやまさん。こぐ
なしんよりはあぢきなき紙。なぐしかまやうく
人めをもなしすなん。よきことは仰べきと口ぬへは
こぐれもてなしまなんしるがひもべるべき。かう
まぐれしんぞしれ。ありがうきれそぐこうまうく
ろへ侍りけるもさきの世の頃をろかなすしじと

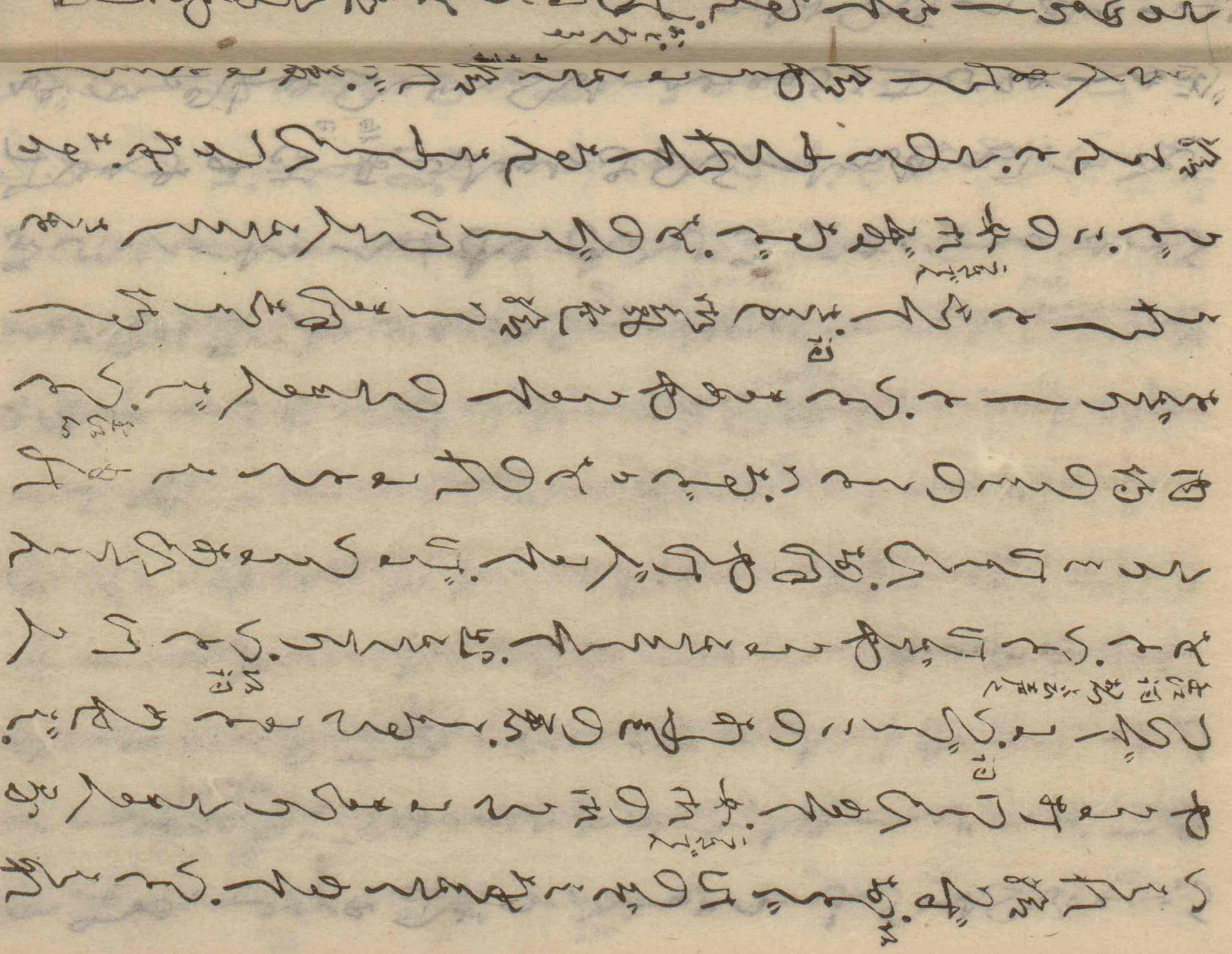


ろへゆり折りも。さきの世の頃とろかなしじと
ゆふ。れをくり抽ちど文まもいとぎ。まべてひき
出抽。ろくども。志れぐまつけて。れいあること恨
おれど。文とくへまなくきさせ。ゆへり。ち文の山
ちやうまことつけ給し。名所もあれば。とく
しきれあそびなどハなし。蛍 芸ゆ文。いまはこと
つけやうもなべきさぐこゆりもなきをとおりうら
さそしのへど。冷 うちより山氣色あることを。ゆへされ
そうし。まるくなほを。志るがひてなん。と
ざ面のことハともりくもふさぐむべきとぞきそ
させ給けり。ちくなんぐハ ひ ほのうちりしき面を。いか
てきやうま文こん。なる面ろほなりことそ給けぐ。



なげかれけれはつましくらて。めでたくされ
中まぎかなしぬ人へまじりける。中納言のきえぞ。
つくゞ物しすかゝるしくてむかし人まてかゝる御わざ
なりのふきくの人へえとてまふじとされく
さられおれしこくと。さらへざ度りつぎたも
しぞきてごとをを給ふ。うくげもちけれど。いと〳〵
あしげる。まじつもひさおげさう。中納言も。うくいつま
つけても。げまし。おやまりろとくゝめへども。まめ
やりまて物し給。かねもしかろゝまてを。ゑくれ
なるされ旨様をさきまかよとおぼさじれころなし
廿七 まげかてこそはかさきいも目もおへ宮まあしおべき

れそしきなれば、つまよりもひかなひ、ゆふ時も、
なんと、ゆくゑしていひねこまへり、中(柏)ねもあまれ
いたやさしこまり給なんや、めやすくとてこそ給
ぬれば、ゆろく(をに)となさて、この(詞)君ごちさへこれすげなう
しまふまゝ、こゝ(こきでん)れ前のれこゝろの衣まかりしませば
こゝふなりとて、いと(比)かやすくいそしく、ドらう
けしきべなどのつうまつりこへぬざうやくをも
こちぬ、しりやすくまどひありさつゝこゝろざしを
つくして、こやづへしありさて、内(壬江詞)仍のこゝろ、を
のれをしなしまへとをめさゝれば、おさまし(こきでんん)う。
いかましひていつことなんとあげまとり、まれも



いられ給りず。おとゞ以のぞこなきゝめて。いとこれ
やうよ打ひひめて。女れのれうこまいりこまへ多
つゞでに。いづしこのあゝ也の君。こゝろこゝとめせど。
とと。いとけざやうよこそして。出こそり。いと以詞久
こうこけしひ。おほやけべまて。げにいうよあひこん
内侍のこゝのことはおとゞをのれよとくしもれ
をぎりしと。いとまめやうまてのこまへだ。いと
うれしとせて。さも此気色給りまほしう侍し
りど。この女れ愛ちど。をのづしけしへこそしさを
給てんと。このこゝ少ろれてちんさゝひつゝを。おほ
さ人もれし給やうよ。あて給れば。愛よとこそし

さん申し給やうにまゐる事なれば、義にとらし

こゝろ心ちし給てなんむ（おどろく）ほるを並にかやうに
給ると申のふ（比）志るぶりいと地さはやかなり。恐（ハ）
のひぬべきをねぐて。（詞）いとあやしうあぼけ
なされくせなりや。さもあぼしの給はましかば。まづ
人のさきにそうしてまし。あ同きお（係）とぐ乃れ
ひすめやんごとなくとも。こゝにをちに申さんことは。
きこしめさぬやうあしざしまし。今までも申文を
とりつゞまて。びゞしうかさいぐされよ。なかうる
などの心ぞんあしんをかしんどんこはすてきを
給りて。（冷）うへはそのうちにあさけすてぜいあもし
まをばなどいとようすしのふ。（比）人のあやげなく

りたまはりや屋(名詞)まとうたはおやもしくもつぐける
なんむねくしさうたのとそこ度よりやさせ
給えぐつまぐ志のやうまてれどくをもりうゆり
侍んとて身(池)氏をしすりてさたしねたまへ里
三年のうしろなどまてさく女家しぬべく見也
抱けひまゐへぬえすべりいでくなんなぐさめ
けり女(うさでん)れもれなまてあらえてまりなうこぐしと
なげしたりと(れ)れも抱むつしさありそおふこの
志うそそよろげまざられとて、さぐけしひぐさる
つりたまへど世人はもちがそしもしたなめ給
なぐさ面くいひ名也

69038
6AP7B